

幼稚園の学級定員再論

山下俊郎

昨年の本誌三月号(第七九卷第三号)にわたしが幼稚園の学級定員について書いたが、それは一昨年(の)日本保育学会の会報にわたしの書いた学級定員についての小論が、編集者の目にとまり、本誌上でいろいろの方々に書いて頂いて定員問題を読者の認識に訴え、この問題の展開を計りたいという意図で始められた企画であった。そしてわたくしの小論に続いていろいろの方々に論じて頂く、その為の火つけ役がわたくしというのが編集部のねらいであったが、続いて四月号に守屋光雄さん、五月号は佐藤文子さん、六月号に立川多恵子さん、七月号に藤田復生さん、そして九月号に海卓子さんと五人のベテランの方々の意見が述べられた。わたくしとしては、もっと沢山の方々に毎月書いて頂いたらという期待を持っていたのであるが、八月号には誰方も書かれず、また十月

号以後には書いた方がなかった。編集部で、昨年書かれた五人の方の論文について、全体のしめくりを書いてほしいという注文があったので、最初に書いた責任上五人の方の論文の読後感をまとめて、わたくしの考えを述べて見たい。

まず、守屋さんの論では、ソ連とスウェーデンの現状を示され、それとの対照において、わが国の定員が、明治以来まったく同じ状態にあり、保育所をも含め、幼児の立場から考えないで、安上り政策、管理優先に支えられた画一、一斉教育という保育者の立場からのみ考えるから、そこにマスプロ保育が行なわれ、保育者養成の問題もからんで、人間性を無視した保育に陥るのだということで、明治以来の一学級四〇人という文明国として恥かしい状況が続いていることを指摘されている。そして、そのあとに、守屋さんがよろしいとされ

る定員数を具体的に示されている。すなわち、一歳児二人、二歳児三人、三歳児一五人、四、五歳児二五人に一人の学習者と一名ずつの助手が妥当であるとされている。わたくし自身もいつも感じているのであるが、守屋さんの言われるように為政者の幼児保育軽視という悲しむべき思想がこの問題の深い底辺に横たわっている一所に、これらの問題の根源があることに憤りと悲しみを感じるのである。

次の佐藤さんの論文では、まず冒頭に、現在の学級定員は多すぎるとはよく聞くことだけれども、その理論的根拠、実証的研究の裏づけを示したものが殆んどないことを指摘されている。佐藤さんの言われる通りであって、それだからこわたくしはそのような実証的研究が進められるべきであることをわたくし自身の提言の中で述べているのである。佐藤さんはそのような研究がまだないという現状に即して、「学級」というものが幼児に対して持っている発達の意義を考察することに、全文の中心を置いておられるが、このような総論的概論的考察はそれとしての意義はあるが、実証的研究によって問題の答を産み出すことがより大切である。前むきに研究して行きたいと述べて居られる彼女の言葉に大きな期待をかけたと思う。

続く立川さんの論文では、彼女の郷土の幼稚園の誕生、十二名の園児から始まったこの園の発展の経過の中に、おのずから学級が出来、それが年齢別になったという所には興味深く読ませるものがある。次に、他の幼稚園で学級制で出発したものが、これを解消したらやはり問題が発生して、もう一度学級、担任制度にもどった歴史の叙述も面白い。園児にとっては「ホームベース」としての学級が必要なのだという結論的解釈はこれもおのずからなる成り行きだと思われる。そこで学級定員を保育者側からと子ども側からも考える、保育者側からの発言では具体的数が挙げられているが、三五人、三三人、二七人と言った数字が出ている、学校教育法施行規則にある四〇人よりもみんな少ない所に注目したい。子ども側からは具体的人数は挙げられていないが、条件だけは考えられている。しかし、まとめとして保育者と幼児との一対一の接触が決定的要因となつて学級の人数が定められるべきであるとし、さらに園全体の規模についても考えられるべきだとする提言は正しい。わたくしは三〇〇人だの五〇〇人、甚だしきは七〇〇人定員という幼稚園はあるべき姿ではないと思う。幼稚園令時代には一園の人数の制限が規定されていたが、当然限定されるべきだとわたくしも考える。

次は独自の保育を自分の園で実践されている藤田さんの論文では、まず共鳴し、打たれるのは、一人々々の幼児を大切に考えるというヒューマニズムの欠除の上に保育という営みが行なわれていることに対する憤りをこめた指摘である。そして、藤田さんは施行規則、教育要領、設置規程などで、「原則とする」とか「標準」とするという様な表現で逃げを打っていることを、実際の条文を挙げて追求されている。また園全体の規模についてマンモス化した幼稚園の現実が、恐るべき保育をしていることを指摘して居られるし、前の立川さんの所でわたくしがふれた園の規模の問題にも論述のペンをのばして居られる。そしてそのあとに、御自身が園長として保育実践をされているゆかり文化幼稚園の実際の姿を紹介されている。藤田さんの園では学級担任制でなくて複数担任制をとって居られるが、その実際には見るべきものがある。ただ、そのまま他の幼稚園で藤田さんの園の様な保育をすることは現状では無理であるかも知れない。論文の終りの所では、一教諭の受持つ幼児数を三歳児一〇名、四歳児二〇名、五歳児二五名を標準として保育を實踐して来たと具体的数字を挙げて居られることには、わたくし達すべてが注目すべきであると思う。そして最後に、規準が示されるとすれば、実証的研

究の成果によってそれが裏づけられるべきであるという意味のことを述べて居られることにわたくしは賛成する。

最後の論者になられた海さんの論文にも教えられる所が多い。一人の保育者の保育する学級定員三〇人という事にカナダからの参観客が驚いたという叙述は、わたくしも全国からの訪問者に接してしばしば経験することである。海さんは長年にわたって保育を続けて来られたベテランであるだけに、その提言には教えられる所が多い。とくに学級定員について具体的数字を挙げて居られる所を見ると、三歳児十数名に二人の保育者、四歳児二五名、五歳児三〇名を望ましい形として居られるのは、わたくしにとっては納得のゆく数字で、園全体の規模についても各年齢児二組ずつで百二十名という数字を挙げて居られる。保育者の一人一人が全園児の名前を知っているということが、大切な条件だという前提から右の数字が出て来ていることもまたうなずける所である。

海さんは定数を左右する条件として今の定員問題に第一に触れたのち、現代のやる気のない子どもに接する為、保育者の指導力と定数との関係が考えられなければならない。そして、スピード化、能率化、機械化された生活の中で、大人の生活の忙しさ、子どもの塾通いに象徴される歪められたそ

の生活の忙しさの中で、年々人間関係がうすれていく現実に対して、どうしたらいいかの提言がなされている。そして、人間らしい子どもと大人のつき合いの中で定数を考えようという最後の提言が生まれている。そこでは、人のいつていること、していることを見たり、きいたりする態度を育てよう、人と人との信頼感をとりもどそう、子どもの実態をよく掴もうという三つの角度から、望ましい保育のできるような定数を考えるべきだと結んで居られる。海さんの論旨は、具体的、実地的な保育にかかわりのあるいろいろの姿から定数が論じられている所に、大きな意味があると言えよう。

* * * * *

わたくしが火をつけた問題について、五人の方が、それぞれの立場から、立派な提言をして頂いたことに、わたくしはまず感謝しなければならぬ。とにかく問題は重要であり、深刻である。藤田さんは、きわめて形式的に、小学校が四〇人定員になれば、おのずから下の幼稚園は三〇人になるだろうと官僚の形式主義を非難する意味で言っているが、これすらもそう簡単にはいかぬと思う。守屋さんが指摘して居られるように幼児保育軽視の風潮が底に強く流

れている現代では中々難しいのである。この点では、教育者の集団である日教組がすでに同じようなことを露呈している。わたくしは最初の提言のとき、日教組が幼稚園の定数問題に無関心であるという非難をしたけれども、五四年度から内部では検討して五五年には決定されることになっているとのニュースがあるのを知らないで非難したことを弁解したが、その後一向にマスコミ線上に現われて来ない事自体が幼児保育軽視につながっているのではないかと、改めてここに文句を言いたい。

文教、福祉軽視という姿勢は、いくら大蔵大臣が合理化した弁解をしようとも否定できない鈴木内閣の逆行的事実である。小学校の四〇人定員の実施がなし崩しに引き延ばされている事実が何よりもよくこのことを示している。この際幼稚園の定数問題を出して論じて、保育軽視という社会的姿勢が改められなければならない、問題の前進は難しいであろう。しかし、わたくし達は、ここで地道に幼稚園の定数、そして出来得べくんば保育所の定数についても、科学的研究を遂行し、その実証的資料を以て訴える方向への努力を重ねて行くべきであると信ずるものである。